

近森リハビリテーション病院 看護部

副看護部長 岡村奈保

看護部目標 【患者・家族のニーズと実生活に即した退院支援】

患者・家族が退院後にどのような生活を希望しているのか、また、どのような不安を持っているのか、これらを把握して退院後の生活を見据えた日常ケアと退院支援を実践することを目標とした。

まず、患者の生活を知る目的で『24時間生活スケジュール表』を作成した。入院前の生活・入院中の生活、ふたつの24時間生活スケジュール表を作成することで、患者・家族、スタッフ共に退院後の生活をイメージした。これをもとに自宅退院へ向けた家族指導・生活指導のための計画を立案するようになった。また、24時間生活スケジュール表を用いて、患者・家族が望む生活と実際の患者の後遺症などの状態により制限される生活などをすり合わせすることも可能であると考えたが、そこまでは十分にできず可能な生活の提案ができたケースがある、にとどまった。

家族指導・生活指導においては、依然、新型コロナ感染者発生の影響により家族との面会時間や院内での滞在時間が限られており、必要な家族指導・生活指導を短時間で実施するために工夫を行った。安心して自宅退院していただくために介護指導のための事前準備として、介護指導内容を紙面でわかりやすく伝える、動画で介護方法を見てもらうなど、患者の状態を家族が理解し、介護方法を獲得できる工夫を行った。また、多職種で退院後の生活を共有し、各職種で必要な場面の介護指導を実施した。

今後も、安心して在宅での生活が送れるように入院早期から入院前の生活を把握し、入院中の患者の状態、家族の生活を含めた退院支援を実践することを継続できるように取り組む。

法人内研修ローテーションの実施

看護師主任1名、看護師3名が9月から2月末まで半年間の研修を実施。

当院から近森病院（SCU）に2名、オルソリハ病院（回復期リハ病棟・地域包括ケア病棟）に2名が異動して研修し、近森病院から1名、オルソリハ病院から2名を受け入れた。

その他、看護部の主な活動報告

資料1 医療安全委員会

資料3 看護部教育委員会

資料2 感染対策委員会

資料4 地域連携室報告

近森リハビリテーション病院 医療安全委員会（資料1）

副看護部長 岡村奈保

はじめに

患者に信頼される医療サービスの提供と医療の質向上を求めていくことを医療安全委員会の基本姿勢として活動を行っている。基本姿勢に基づき医療安全活動の必要性・重要性を院内の全部署及び全職員に周知徹底し院内共通の最重要課題として取り組みを行っている。

活動内容

- インシデント・アクシデント事例の共有、および医療安全カンファレンスの開催によりインシデント・アクシデント要因の振り返りを行い同じ事故または、重大事故につながらないための情報発信を行っている。
- 研修会の開催により、医療安全への意識向上を行っている。
(研修会内容)
*2023年8月患者誤認を防ぐ患者確認方法
*2024年2月転倒・転落の振り返り

まとめ

2023年度医療安全目標を昨年度から継続して『転倒による損傷(骨折)が発生しない』『患者誤認防止』を挙げ取り組んだ。

転倒件数は、昨年より若干減少したが、転倒による損傷(骨折)は5件発生している。研修会の開催、毎月の転倒発生状況の共有による転倒防止への意識付けを行った。また、転倒時の衝撃を吸収するための『ころやわマット』を導入。衝撃吸収マットの導入は2024年2月になったため、2024年度の転倒時の損傷状況を確認する予定。

	2023年	2022年	全国平均： 日本病院会 2021年データ	転倒率 ^{※1} ： $\frac{\text{転倒・転落発生件数}}{\text{入院患者数}} \times 1000$ (%)
転倒率 ^{※1}	4.10‰	4.17‰	2.82‰	

『患者誤認防止』に関しては、昨年2022年31件の報告があり、チューブ間違いや内服間違い、検査間違いなどが発生していた。2023年は19件と減少し報告内容はカルテの記載間違いなど患者に直接影響する報告はなかった。上期研修及び中途採用研修において患者確認の具体的な方法を実践した動画を見てもらったのが効果があったと思われる。また、現場において所属長、セーフティスタッフが患者確認方法の指導を実践していることも効果的だと考える。

2024年度に向けて

- 転倒によるアクシデント減少（継続）
- 誤薬防止（看護師による与薬忘れがなくなるように取り組む）

近森リハビリテーション病院 感染対策委員会（資料 2）

看護師長 岡本真由美

委員会活動及び ICT の取り組み

・感染防止対策加算 1 にかかる医療機関との年 4 回の院内感染対策に関するカンファレンスの実施（ICT 全員）。

・ICT ラウンドの実施（各病棟 1 回/週 病棟以外は 1 回/月）を行い、各部署に報告及び改善案の提出義務化。

・院内抗菌薬の適正使用の監視（使用理由、腎機能、細菌培養、TDMの結果など）。

・週報の配信（医局員、各所属長や責任者、主任、リンクスタッフなどに配信して下部まで伝達）。内容は、細菌培養での検査結果から注意すべき感染症者の報告や抗菌薬の使用状況、職員及び託児所や近森会グループ内および県下の感染症情報、ラウンドで気になった点を中心に感染対策への注意喚起など。

感染対策マニュアルの追加および改訂。

・年 2 回全職種対象感染対策セミナーの開催（テーマは、上期：COVID-19 感染症について 下期：感染対策における環境整備の位置づけ ）

・月別耐性菌発生患者の把握（MRSA、MSSA、P. aeruginosa、ESBL、MDRP、PRSP、BLNAR、CD-T、メタロβラクタマーゼ産生菌、AmpC 産生菌、CRE、VRE など）。

・手指衛生サーベイランス（速乾性手指消毒剤の使用状況、手指衛生の観察）。

・リンクスタッフによる職場巡視。

・洗浄、消毒、滅菌、リネン管理、感染廃棄物、感染対策物品の検討

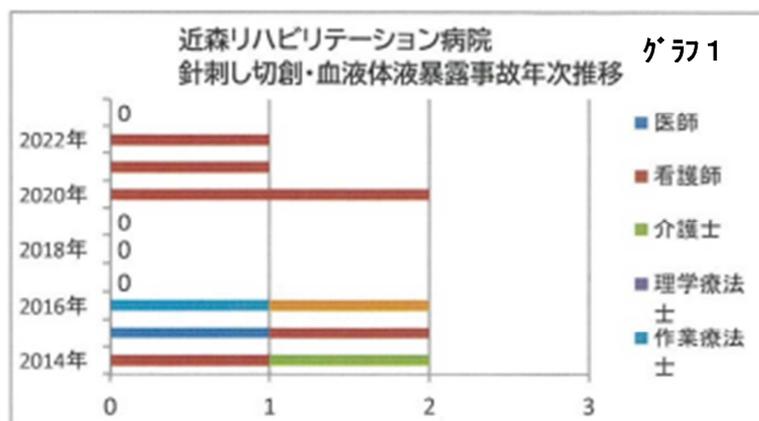
・各部署やリンクスタッフからの相談対応

・院外研修参加

・新型コロナウイルス感染症対策

針刺し切創、血液体液暴露事故について（グラフ 1）

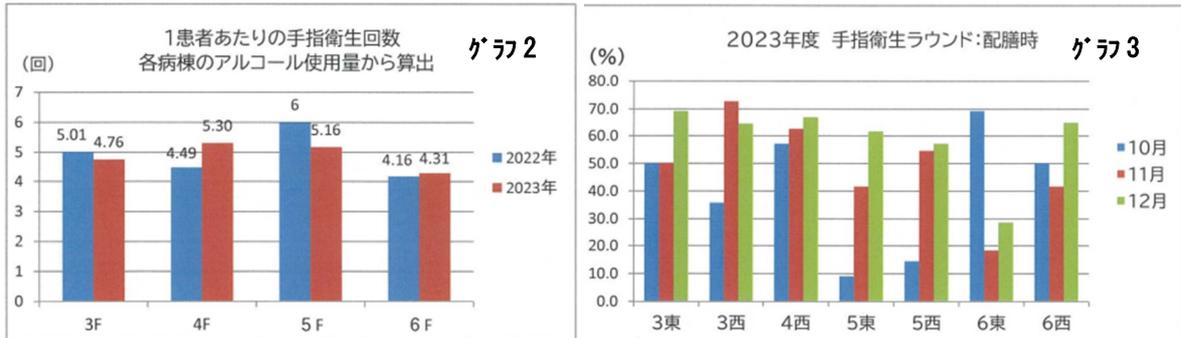
針刺し切創、血液体液暴露事故については、2023 年は発生なく経過できている。本院での針刺し事故の事例を当院でも周知し、多発していた翼状針による針刺し切創がないよう注意喚起を行うとともに、8 月 31 日の「針刺し 0 の日」にも週報にて意識づけをおこなった。



手指衛生について（グラフ2・3）

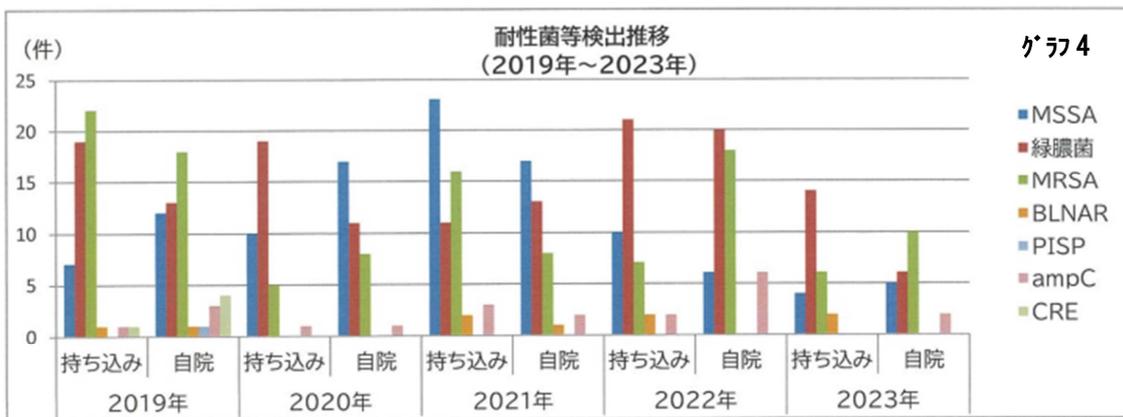
手指衛生は、速乾性手指消毒剤の使用量のサーベイランスや手指衛生の直接観察法を実施した。手指消毒剤の使用量から1患者あたりの手指衛生回数を算出したところ、平均は2022年、2032年とも4.9回と変化はなかった。

手指衛生の直接観察法は10月から開始した。当院は日中患者が病室で過ごすことが少なく、観察場面を選択するのに苦慮したが、検討の結果、多職種の手指衛生場面が観察できる配膳時に観察することとした。未だに手指消毒剤を携帯していないスタッフがいるなどの発見もあり、週報への提示やリンクスタッフ等を通じて再指導している。



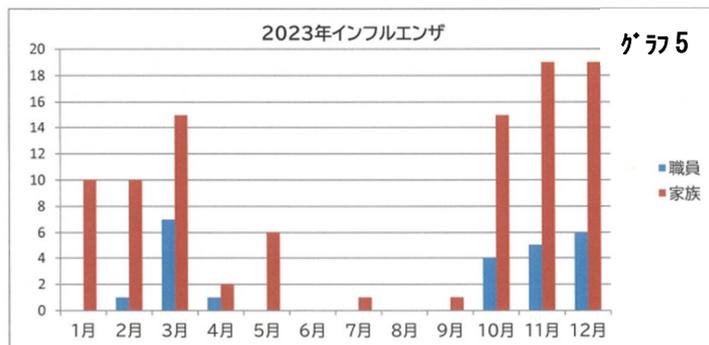
耐性菌の検出について（グラフ4）

MSSA・MRSAとも2022年に比べて「持ち込み」「自院発生」とも検出は減っている。2023年も緑膿菌の検出が多い印象であったが、2022年と比べると減少していた。2023年は全体的に検出件数が少なかった。耐性菌のアウトブレイクや多剤耐性菌の検出、CD-Tの検出もなく経過できている。



インフルエンザについて（グラフ5）

10月以降職員家族からは毎月15名以上の感染報告があったが、職員の感染は少なかった。2023年の患者の感染は1名のみで、1月にインフルエンザBに感染したが、感染経路は不明であった。

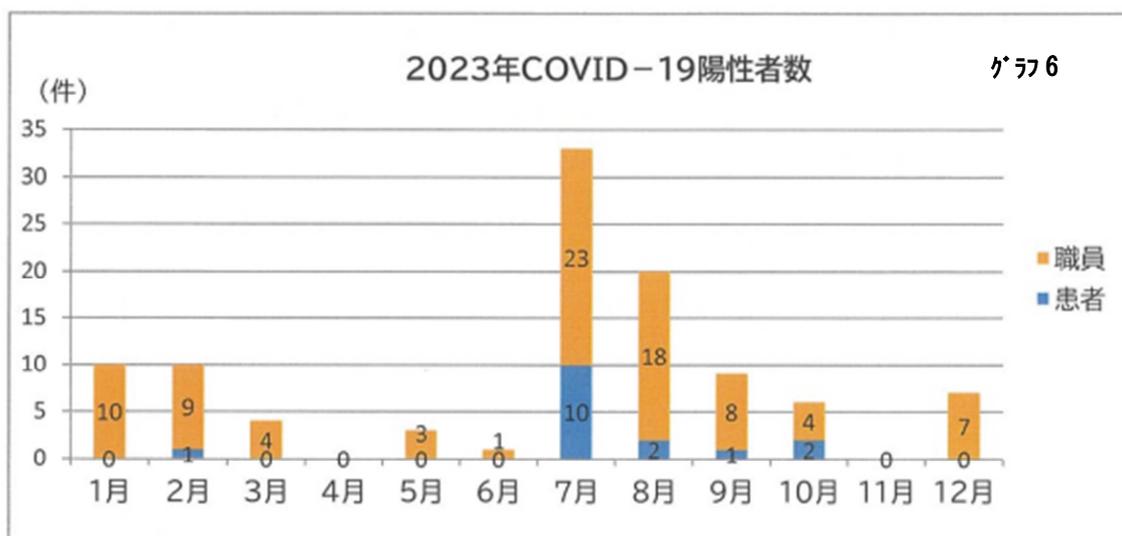


疥癬・結核について

2023年も疥癬・結核の発生はなかった。

新型コロナウイルス感染症対策について（グラフ6）

2023年は、当院も少なからず第8波・第9波の影響を受けた。年間では、職員が87名発症したが、患者の感染は16名にとどまった。7月には1ユニットからクラスターが発生した。5月から新型コロナウイルス感染症が5類に移行し、それに伴って感染対策も見直しを行った。面会については、これまでガラス越しでの面会やWeb面会のみとしていたが、予約制で病棟個室を使用しての面会を開始した。介護指導も病棟個室でできるよう変更した。変更にともない、それぞれルールを作成し周知した。面会や介護指導によると思われる感染はなく経過した。



近森リハビリテーション病院 看護部 教育(資料3)

教育担当シニア看護師長 中村里江

1. 新人看護師教育担当者会活動

1) 活動実績

当会は入職した新人看護師のジェネラリスト教育と、新人看護師だけでなく他院から入職してきた既卒看護師および介護福祉士等も合わせて回りハ病棟のケア業務にスムーズに適応できるための教育支援を主な目的として活動を行っている。例年は、通常各ユニットから1名の委員が選出して活動を行っているが、2023年度は当院に新人看護師の配属がなかったため、委員会メンバーを半減して活動を行った。

2023年度は、他院(近森病院、近森オルソリハビリテーション病院)からの異動看護師:4名、中途採用の看護師:1名が新たに入職してきた。また9月~2月の間には、他院からローテーション研修生:3名が配属され、回りハ病棟での業務と看護を学ぶための教育支援を行った。

さらに、今年度は、年間活動計画の中に2年目~3年目への支援を立案した。その背景として、これまでの当会の活動の対象は1年目の新人看護師が中心で、1年目から2年目へと移行した看護師への支援についてはすべてをOJTに委ねる形となり、支援計画や体制が十分でなかった現状がある。当院では心身の不調や業務内容への適性を理由に2年目~3年目に離職するスタッフが目立ってきたこともあり、委員会として取り組む必要性があるとの認識が高まり、今年度は委員会活動としてより明確に取り組みを行った。

今年度の活動実績の概要は下記(1)~(3)に記述する。

(1) 2年目~3年目看護師の教育支援

【2~3年目看護師技術チェックリストの運用】

2年間~3年目看護師を対象とした看護技術チェック表を作成し、技術項目の習得めざすとともに、技術の評価・課題の明確化・目標設定・到達に向けての行動計画を立案する一連のプロセスを、所属部署の実地指導者・教育担当者・病棟管理者と共有することで、1年目と同様に組織の中で支援をうけながら育っていく仕組みを作ることを目的とした。チェックリストは1年目の技術チェックリストと同じ項目を使用し、評価時期や方法については新たに手順を作成した。部署全体で取り組むことを前提に、運用のマネジメントを部署の教員担当者または看護主任に依頼した。評価時期は、年2回(9月、3月)とした。

(2) 異動看護師の教育支援

(3) ローテーション研修看護師の支援

上記(2)(3)では、当院において回復期リハビリテーション看護業務を行う上で必要な基本的知識や技術、手順、体制などを学ぶためのオリエンテーション研修を企画・運営した。

以下、表1・2に集合研修の実績を示す。

表1 2023年度 異動スタッフ対象オリエンテーション研修

月 日	テーマ
4月12～14日	近森リハビリテーション病院 新人職員研修
5月9日	FIM講習会（基礎編/セルフケア①②）
5月16日	FIM講習会（基礎編/認知項目）
5月17日	PTOTSTの役割（PT→ST→OT）
6月5日	嚥下障害とリハビリテーション
6月20日	当院の診療システムと看護
6月20日	嚥下障害の看護
7月14日	日常生活機能評価研修
7月18日	回リハ病棟における排泄ケア
8月4日	高次脳機能障害の看護
8月15日	回リハ病棟における脳卒中の看護
9月8日	回リハ病棟の基本的ケア（10項目）
10月31日	失語症とリハビリテーション

表2 2023年度ローテーション研修生対象オリエンテーション研修

月 日	テーマ
9月12日	回リハ病棟における医療安全とケア
9月13日	嚥下障害とリハビリテーション
9月25日	嚥下障害の看護
10月6日	テクノエイド
10月12日	当院の診療システムと看護
10月23日	リハ病院看護部の組織体制と看護・介護について
11月9日	高次脳機能障害のケア
12月1日	失語症とリハビリテーション

2) 評価と課題

(1) 2年目～3年目看護師の教育支援

2から3年目看護師技術チェックリストの運用は初めての試みであり、今年度は3名の2年目看護師を対象に取り組んだ。運用手順については大きな混乱もなく、評価を行うことができた。評価する中で、以下の2つが課題としてあげられた。

①技術項目の中には、当院では経験する機会がほとんどないかあるいは一度経験しても次に経験するまでに期間が空くことで、1年目に到達していた技術項目でも、現在は自立して実施できない技術項目が見られた。

②チェック表はジェネラリストの一般的な技術項目で構成されているため、当院で2年目以降に身に付けてほしいリハ看護技術について評価できない仕様となっている。

明らかになった課題については次年度の教育担当者会活動で継続して取り組んでいく。

(2) 異動看護師の教育支援 (3) ローテーション研修看護師の支援

集合研修を実施し、受講者から現場の実践に役立てることができたという良い評価を得た。病棟でのケア業務と並行して各月開催したことが実践との結びつきで思考することができて良かったという評価だった。ただ、業務時間中に数時間だけ病棟を抜けて参加するという形式だったため、参加者によっては自分の病棟業務の進捗や残務状況が気になってしまい、講義に集中することがむずかしい日もあったという声も聞かれた。研修開催の時間帯についても次年度に工夫をする必要がある。

2. 近森リハビリテーション病院看護師教育委員会

■近森会グループ看護部教育委員会活動

8名の委員のうち、半数の4名は近森会グループ看護部教育委員会の委員を兼任している。

1) 活動実績

当院から4名の教育委員が近森会グループ看護部教育委員会のクリニカルラダー研修の運営に参加している。今年度はラダーレベルⅡ「事例検討会」「看護過程」「ケース発表」「倫理Ⅱ」4つの研修グループに各委員が所属してラダー研修の企画・運営・評価を行った。

2) 評価と課題

近森会グループ看護部教育委員会での研修活動も定着してきた。レポート評価や実施報告書の作成活動なども体験し、ラダー研修への理解も深められたと思う。今年度の活動をもって、近森会グループ看護部の教育委員会活動は役目を終えることになり、次年度より、これまでのラダー研修に代わる教育活動を自病院で行うことになる。

■近森リハビリテーション病院看護師教育委員会活動

1) 活動実績

今年度は前年度の勉強会の3つのテーマを継続し、加えて今年度の看護部の目標である「退院支援」もテーマに加えて、計4つのテーマで勉強会を企画・運営した。

<2023年度 リハ病院看護師教育委員会 勉強会テーマ>

- ①退院支援
- ②急変時の対応技術
- ③急変に至る兆候とその対応
- ④抑うつ看護

2023年度 テーマ別勉強会一覧を表3に示す。

表3 看護師教育委員会勉強会

月 日	テーマ
①退院支援 (事例検討会)	
11月29日	脊髄梗塞による対麻痺・排尿障害のある患者に対するの排尿管理について
1月23日	退院後の回復期待が高い家族との関わりを通して
2月8日	胃瘻栄養を行う患者・家族に対する自宅退院に向けた支援

②急変時の対応技術	
10月13日	急変対応について－急変患者発見から搬送まで－
2月20日	急変対応について－急変患者発見から搬送まで－
③急変に至る兆候と対応	
12月15日	脳卒中再発の兆候とその観察
④抑うつ看護	
1月29日	抑うつ・認知症の精神症状に対するケア－当院で使用される薬剤の知識を中心に－

2) 評価と課題

①退院支援

退院支援は回復期リハビリテーション看護そのものであり、個別性の極めて高い看護実践力を必要とする。そのため、事例を通してディスカッションを行い、ケアや患者・家族の反応を振り返ることで、患者・家族への理解を深め、実践への意味づけや学びを共有することを目的として、今年度初めて「事例検討会」を委員会活動の中に取り入れた。

今年度は現場から3つの事例を提供してもらい実施した。3回を通して明らかになったことは、どの事例もディスカッションが進んでいくと、テーマは患者・家族への意思決定支援に帰着し、自分達が倫理的ジレンマを抱えながらも患者家族と話し合いをし、他職種とも議論を重ねながら退院支援の方向性を何度も確認するプロセスを体験しているということであった。また退院支援における回り手のスキルについても共有することができた。事例提供者、参加者の反応も良かったため、次年度も継続する予定である。

②急変時の対応

シミュレーション研修を行うための教材として作成した動画が完成し、今年度は、それを用いて集合研修を行うことができた。当院における急変時の実際の対応手順や技術を集録した動画は、受講者にはかなり好評であった。動画視聴とシミュレーション研修をセットにして複数回の開催を計画したが、シミュレーションを行うための人数がそろわなかったため、シミュレーション研修を行えたのは1回となった。

③急変に至る兆候への対応

講師は昨年と同じく近森病院脳卒中認定看護師に依頼した。当院で遭遇する可能性が高い患者の異変に気づき、アセスメントと必要なケアを実施でき、SBARで報告ができることを目的として企画した。昨年までは、紙面で場面設定した事例を頭の中で思考する研修スタイルであったが、今年度は現場で実際ありうる場面を設定し、ロールプレイを取り入れた。講義で学んだ観察技術やアセスメント方法を用いながら実際の看護師の思考と動きを通して学ぶスタイルとした。参加人数は少なかったが、参加したスタッフからは好評を得た。

④抑うつ看護

抑うつ・認知症の精神症状に用いる薬剤とケアについて、当院で使用される薬剤の知識とケアへの活用を学ぶ目的で企画した。事前に学習ニーズの把握を行い計画したが、集合人数が少数となったため中止延期とし、次年度開催を予定している。

【全体的な評価と課題】

①～④については次年度も継続していく。開催時期については、近森会看護部のラダー研修開催期間が終わってからの開催となり、例年11月～3月で開催計画を立てることから、年度末の人員減や感染症の流行があいまって、集合研修に参加できるスタッフ数が少なくなっている。次年度からはラダー研修の開催がなくなるため、当教育委員会主催の勉強会開催日程を早めることで集合研修に参加しやすくなるよう調整したい。ただ、人員が増えない中で、集合できる人数にも限界があるため、今後はさらに研修目的や学習ニーズに合わせた研修方法を工夫していく必要がある。中でも急変時の対応を集録した動画については、実際に視聴したスタッフからは「わかりやすかった」と評価が高かったため、いつでもスタッフが動画にアクセスできるように、院内のポータルシステム活用などを検討していく。

3. 近森リハビリテーション病院介護福祉士教育委員会活動

1) 活動実績

介護福祉士教育委員が年間の教育計画を立てて教育活動を行った。集合研修のテーマは前年度末の活動評価と現場スタッフのニーズ調査に基づき、教育委員が選定している。また毎年必ず事例検討会を計画し、病棟スタッフから提供される事例をについてディスカッションを行っている。今年度は前年度の新入職員によるケース発表会も開催した。

2023年度の勉強会一覧を表4に示す。

表4 介護福祉士教育委員会勉強会

月 日	テーマ
4月25日	症例検討会
5月23日	10項目について（入浴）
6月27日	オムツの種類/オムツ交換について
7月25日	急変時の対応
9月26日	新人ケース発表
10月24日	介護保険について
2月27日	10項目について（更衣）
3月26日	トランスファー/ポジショニング

2) 評価と課題

集合研修はほぼ計画通りに開催できたが、概ね参加人数が少なく、運営する教育委員以外にスタッフが数名参加したというものもあった。ケースレポート発表会では、看護管理者や他部署の介護福祉士なども多く参加し、質疑応答も活発にでき、介護福祉士の学びを参加者で共有できる良い機会となった。実技研修であるトランスファー研修については、11月開催予定であったが、参加者人数が少なかったため、3月に延期した。3月も実技研修を実施できるほどの人数が集まらなかったため、研修方法を、資料配付による自己学習の形態に急遽変更した。

次年度の研修ニーズを把握するためのアンケート調査を行い、広く意見を収集することができた。集計の結果、集合研修への参加のしづらさの理由として、各部署での介護福祉士の配置

人員が少ないために研修日当日に日勤勤務を希望できる介護福祉士は1名が限度であること、かといって自分の休日に勉強会に参加するほど余裕がないことなどの意見が特徴的であった。このことから、集合研修への参加には限界があり、今後改善する見込みがないことから、介護福祉士教育委員会でも、集合研修に代わる自己研鑽方法やしくみを検討している。

4. 看護補助者教育

1) 活動実績

今年度は初めて派遣業者からの看護補助者の入職が7名あった。身体介護業務を行えるスタッフもあり、安全に業務を実施してもらうために、オリエンテーション研修を実施した。

2023年度の集合研修の実績一覧を表5に示す。

表5 看護補助者対象オリエンテーション研修

月 日	テーマ
1月10日	近森リハビリテーション病院と看護部の概要
1月10日	医療安全について
1月12日	個人情報の保護と守秘義務 近森リハビリテーション病院の職業倫理 医療現場の接遇・マナー・身だしなみ
1月19日	感染対策について
2月21日	トランスファー研修（ノーリフトケア）

2) 評価と課題

勤務時間や出勤日にばらつきが大きく、全員集合することが難しいため、上記日程に加えて同じ研修を数回ずつ追加実施することで全員受講することができた。またスタッフ個人によって業務内容が異なるため、ニーズや状況に合わせた内容で行うことが求められる。

2023年度 学術発表・講演会等

学会発表

演題	発表者 共同研究者	学会名	開催
当院における退院支援の課題（外来看護師からのフィードバック情報を分析して）	岡部美枝	医療マネジメント学会学術集会	2023/8/27
回復期リハ看護師の活動と今後の課題	岡部美枝	リハケア合同研究大会	2023/10/26 ～27
回復期リハビリテーション病棟における急変対応の教育～動画を使用した教育の試み～	和田幸恵	リハケア合同研究大会	2023/10/26 ～27

講演・外部講師

演題	発表者 共同研究者	学会名	開催
看護介護 10 か条の意味	岡本 真由美	全国回復期リハビリテーション病棟協会主催 初任者研修	2023/1/24
看護介護 10 か条の意味	岡本 真由美	全国回復期リハビリテーション病棟協会主催 初任者研修	2023/7/22
看護介護 10 か条の意味	岡本 真由美	全国回復期リハビリテーション病棟協会主催 認定コース研修	2023/8/31
看護介護 10 か条の意味	岡本 真由美	全国回復期リハビリテーション病棟協会主催 初任者研修	2023/11/17
現場での業務の展開	植田 彩子	高知学園短期大学歯科衛生学科	2023/6/28

論文発表・著書

タイトル	執筆者	掲載誌 出版社	巻、号、ページ
看護・介護 10 か条と各項目の評価方法の解説 家族へのケアと介護指導を徹底しよう	岡本真由美	リハビリナース	秋季増刊 P.192-213,2023
特集ここが知りたい高次脳機能障害の患者さんの“困った行動にどう対応する？”一食事を時間内にたべることができない（注意障害）	須賀麻弥	リハビリナース	Vol.16,No.6, P.18-23,2023

院外活動（外部委員・役員等）

団体名	委員・役員	氏名	期間
一般社団法人回復期リハビリテーション病棟協会	看護委員会委員	岡本真由美	2021/5～
高知女子大学看護学会	学会誌査読委員	中村里江	2015/4～
高知県リハビリテーション研究会	役員	植田彩子	2023/8～

看護学校等 非常勤講師

学校名	講師	講義名
近森病院附属看護学校	中村里江	リハビリテーション概論

近森リハビリテーション病院 地域連携室(資料4)

シニア看護師長 岡部 美枝

入院相談件数・病床稼働率

入院相談件数の合計は 895 件とやや増加した。(図 1) (図 2)。COVID19 感染症による昨年の 9 月から受け入れていた COVID19 感染症患者 (CU:20 床) は、3 月で終了した。5 月からは COVID19 感染症が 5 類へと移行したが、感染症対策は継続している。1~2 月は COVID19 感染症クラスター発生による受け入れの影響が認められたが、徐々に影響は小さくなった。スタッフ数減少に伴い、CU 閉鎖後は 160 床で運用を開始。秋までは入院相談に対し、スムーズに受け入れができていたが、年末にかけて紹介患者数が増加。満床が続き、受け入れまでに時間を要したり、お断りをするケースが増えた。そのため、NASVA の重度後遺症障害者短期入院協力事業での患者受け入れについては、予定を聞き取り対応。また、近森病院・オルソリハ病院の連携部門と連携し、患者の受け入れ調整を行った。

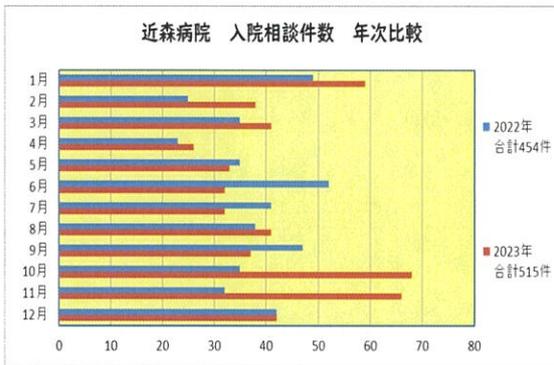


図 1 入院相談件数 (近森病院)

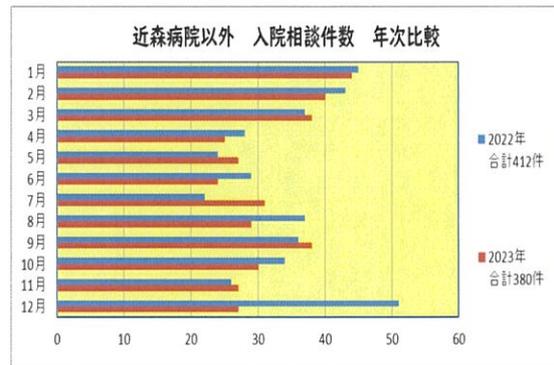


図 2 入院相談件数 (近森病院以外)

2023 年も日常生活機能評価重症患者受け入れ割合 4 割を維持することが最も重要な課題であり、コントロールに苦慮した。自立度の高い患者の入院日数の短縮化により、軽症患者の受け入れ件数が増える中、病棟管理者のベッドコントロールの協力もあり、平均 40.6% となんとかクリアできた。その他、実績指数、在宅復帰率、日常生活機能評価改善率などについても、データ管理を行いクリアできた。2024 年 1 月からはオルソリハ病院が回復期リハから地域包括ケア病棟へかわる。年末より整形外科患者の転院相談が増えてきたが、満床が続いていること、また、各要件のクリア状況から受け入れが進んでいない。退院支援の状況もチェックしながら、各診療報酬要件を短期間でチェックし、整形外科患者の受け入れを少しでも増やすことができるよう、対応していきたい。

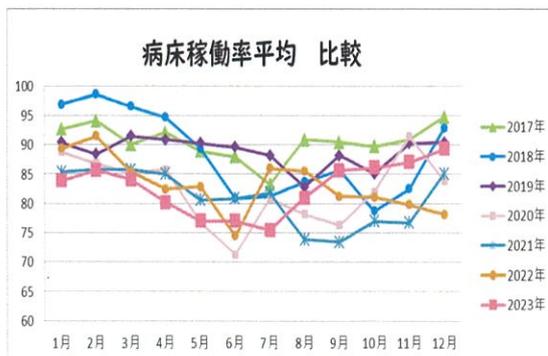


図 3 : 病床稼働率平均比較

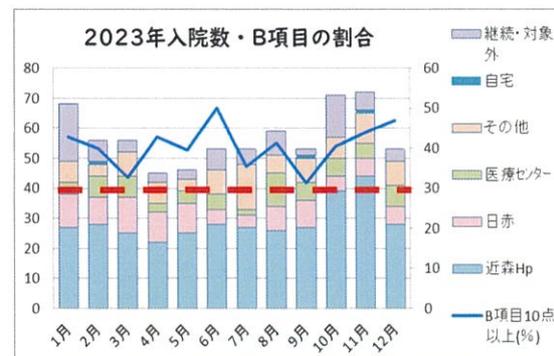


図 4 : 入院数・B 項目 10 点以上の割合

課題

- 退院支援の状況もチェックしながら、各診療報酬要件を短期間でチェックし、整形外科患者の受け入れを少しでも増やすことができるよう対応していく。
- 近森病院 ER や整形外科と連携し、早期の整形外科患者の受け入れができるよう方法を検討する。
- 近森病院・オルソリハビリテーション病院との連携を継続し、患者のスムーズな受け入れ調整を行う。
- 病院訪問や高知県回復期リハビリテーション病棟協会、脳卒中連携パス合同会議など、他院との連携を積極的に行う。(現地開催での顔の見える連携)